第8章 キルスイッチ

01 — 失われた十二分間

失われた十二分間は、物理的なフィルムから切り取られていた。デジタル記録の削除と、人間が戸棚を開け、封印を破り、一定の長さのフィルムを手で引き抜いた痕跡との違いを、レイチェルは理解していた。二本のねじには動かした跡があり、古いラベルの剥がされた場所には白い接着剤が残っていた。

ロイは戸棚に触れずに調べた。国防省はクロノスの廃棄が完了したと説明し、政府はその言葉を繰り返すことで、いつの間にか説明そのもののように扱っていた。しかしここには数字より厄介なものがある。意図的に作られた空白だ。

ヌルが計時回路を調べた。「事件のときにフィルムが破損したわけではない。あとから編集されている」

「軍がやったのか？」とロイ。

「物理的に立ち入る権限を持っていた誰か。それ以上は証明できない」

クロノスは傷が見える位置に立ち、用意された椅子には座ろうとしなかった。戸棚の反射には、扉の上の古い写真より若い少年が映っていた。黒い上着を着て、名前を削り取られた男たちを見上げている。

「何が起きたのか知りたい」と少年は言った。「僕のいないところで、僕に何が起きたのか決めないでほしい」

レイチェルは証拠袋を彼に見える場所へ置いた。書記官は立会人名簿に少年の名前を加えた。初めて、彼の年齢や身体、曖昧な過去を理由に同意が不要だと主張する者はいなかった。

エイドリアンが証拠の受渡台帳を持って来た。剥がされたラベルの下に、なお一つの記載が残っていた。廃棄が報告された夜、フィルムは民間病院へ移送されていた。宛先には名前ではなく番号が書かれている。

次に向かうべき場所が決まった。

02 — 閉鎖されなかった病院

病院は、都市地図にはいまだに立入禁止区域と記される地区にあった。低層階は工場労働者の負傷のために、高層階は雇用者が生かしておく費用を負担できなくなった患者のために造られていた。所有者は何度も変わったが、ポンプは動き続け、記録も紙のまま残されていた。

旧受付で出迎えたのはイマニ・ヴェイル医師だった。彼女は当時の事件に立ち会っていないことを隠さなかった。

「前任者が指示を残していました」と彼女。「症例71について尋ねる人が来たら、警備報告ではなく治療記録を見せるように、と」

「なぜ？」とレイチェル。

「二つの記録が、違う出来事を記しているからです」

イマニはランプの下へ紙のカルテを広げた。そこには心拍も自発的な運動反応も測定できない状態で搬入された軍用個体の記載があった。一方で、通常より低い温度で保存されていた神経組織には生存可能性があった。最初の記載には蘇生の許可はない。別の医師の筆跡で、あとから《患者の状態に異議あり。観察を継続》と加えられていた。

ロイがクロノスを見る。「この病院を知っているか？」

少年は首を振った。それから廊下にある傷だらけの木製の手すりを指さした。

「匂いは知ってる。消毒液と、熱い銅の匂い。それから冷たいものを握っていた記憶がある」

イマニはそれを証拠だとは呼ばなかった。彼の記憶に代えてではなく、照らし合わせるために次の頁を開いた。

軍の担当者が神経基盤の破壊を要求したとき、当直医は独立した証人を求めていた。その要求によって移送が十二分間遅れた。

「失われた時間だ」とヌル。

「かもしれません」とイマニ。「まず、その場にいた人を確かめましょう」

03 — 二つの意味を持つ命令

許可書にはヘイヴル大臣の印章があるが、筆跡は本人のものではなかった。この違いは重要だった。ヘイヴルはすでにロイを追う五人の処刑者を送り出した責任を認めている。今さら記録が彼を免責する理由はない。しかし、大臣による承認と技術者による実行は別の行為であり、この文書はその区別を避けられなくしていた。

第一項はMBU-09の軍用指揮層の停止を命じていた。第二項は、それで停止しなかった場合に宿主の身体を破壊してよいとしている。その下に小さな条件文があった。《軍用ではない組織を含む場合、不可逆的な処分の前に保存審査を義務付ける》。

「この条件を書いたのは誰だ？」とロイ。

署名を見る前にレイチェルが答えた。「ダニエル・リード」

確かにあった。《D.
Reed、医療顧問》。部隊の設立よりも前の記載だ。

クロノスが印を見つめた。「僕がどうなるか知っていたから、彼は署名したの？」

「この一枚からは分からないわ」とレイチェル。

イマニが外科医の報告を差し出した。軍の遠隔測定では戦闘指揮系の停止が成功している。そのとき身体の心臓も停止した。自動集計システムは二つの観察結果を《廃棄完了》に変換していた。病院の医師は、その表示が部隊の状態を記したのであって、身体内のすべての生きた組織の死を意味するとは限らないと異議を唱えていた。

ロイの中に見慣れた怒りが湧いた。管理に都合のよい一語が、かつて自分の身体を分解してよい理由にされかけた。

「違いを分かっていた者がいたんだな」

「違いを訴えた者がいた、ということです」とイマニ。「聞き入れられたかどうかは分かりません」

クロノスは頁から顔を上げた。「じゃあ、政府はスイッチが動いたと嘘をついていたわけじゃないんだね」

「そうだ」とヌル。「機械は設計された対象の停止を報告した。問題は、その状態表示を一人の人間についての判決にしたことだ

」

彼らは初めて確かな答えを得た。しかし目の前の少年がここにいる理由までは説明できなかった。

04 — 二度目の始動

失われたフィルムは消えていなかった。病院の旧新生児病棟の地下にある封印金庫へ移されていたのだ。受渡台帳に管理番号はあるが、開封許可はない。イマニは司法命令を取得し、それから一行を地下へ案内した。

手続きに時間がかかることにロイは苛立った。だがクロノス自身が命令書を大人と同じ慎重さで読んでいるのを見ると、その考えを改めた。特別な子供には普通の手続きが不要だと決めつけることにも、静かな暴力がある。

回収されたフィルムに映っていたのは秘密の兵器研究所ではなく治療室だった。カメラは固定され、古い蛍光灯の下で映像が途切れがちに動いた。軍用の身体が手術台に横たわり、白い手術着を着た人物を含む数人が周囲を動いている。

四分目、主任医師は独立した灌流装置を接続した。六分目、生き残っていた神経領域に電気活動が戻ったが、意識と呼べるほど整ったものではない。九分目、看護師が、この患者は再建を拒む意思を示したことがあるのかと尋ねた。

すぐには誰も答えなかった。《D.
REED》と記された封印袋が取り出された。

クロノスは、投影された映像から記憶を引き出そうとするように身を乗り出した。

十一分目、医師は袋の中の文書を読み上げた。「緊急時の保存は許される。人として再建するには本人の同意が必要であり、身元が不確かな状態を同意と見なしてはならない」

再建そのものが映る前にフィルムは終わった。

「僕がここにいる説明にはならない」とクロノス。

「ええ」とレイチェル。「でも、スイッチの作動だけで記録を終わらせられなかった理由にはなるわ」

外科医は緊急権限で生存可能な組織を保存した。軍はそれを無許可の生存と呼び、病院は治療と呼んだ。どちらも、現在のクロノスがその台に横たわっていた者と同じ主観を持つ存在であることを証明しない。

フィルムの最後の一こまより先まで、記録が語るかのように扱う誘惑には抗わなければならなかった。

05 — ノーと言った少年

フィルムの下に、もう一つのファイルがあった。少年型の身体に後年入っていた人物への聞き取り記録だ。写真の顔はクロノスだったが、カメラを見る目の疲れを少年自身は覚えていなかった。

《質問者：ダニエル・リードという身元の継続を認めますか》

《対象者：彼の人生の一部を覚えていることは認めます》

《質問者：同じ答えですか》

《対象者：いいえ》

《質問者：さらなる身体の交換を承認しますか》

《対象者：今日はしません》

録音では質問の言い方を三度変えていた。少年はそのたびに拒んだ。誰かが面談に《未完了》と印を付け、記憶安定化処置のあとで繰り返す計画を綴じ込んでいた。

「僕だったかもしれない」とクロノス。

「以前の個体かもしれない」とエイドリアン。「日付と移送記録を調べる必要がある」

クロノスは目をそらさなかった。「拒んだなら、止めるべきだった」

レイチェルは、拒否は守られた、病院は聞き入れた、その後は誤解だったと言いたくなった。しかし記録はそんな慰めを許さない。

「一つの処置を止めた人がいるようには見える」と彼女。「でも、その後に別の処置が続いたかどうかは分からない」

ロイは封じられたE-00の名を思い出した。あの拒否もまた、歴史を修理していると信じる者たちから守られていた。未解決の人生すべてを一つの大きな計画に結び付けるのは簡単だ。だが、それは無責任だった。

「彼に何があったとしても」とロイは少年に言った。「それでお前のことを俺たちが決めたりはしない」

クロノスは書類の端を握った。「じゃあ、しまう前に残りも読みたい」

皆は朝まで付き合った。

06 — 戻ってきた命令

次の危険は回復された記憶ではなく、病院の古いアクセス装置へ届いた現役の軍用要求だった。

管理者に対し、保管中の神経基盤と派生記録のすべてを引き渡せという。法的根拠は暫定憲章によって失効している。しかし接続

装置には昔の警備盤へ直結するリレーが残っていた。緑色のランプが琥珀色に変わる。

ヌルは警備盤を建物のネットワークから切り離した。ランプは変わらない。

「第二の経路がある」と彼女。

治療用冷蔵庫の電力が落ち始めた。引き渡しを拒んだ施設の保守機能を止めて罰するための仕組みだった。隣の病棟には六人の患者がいる。酸素供給も冷却設備も共通の予備回路を使っていた。

ロイは警備盤を壊せる。その方法も分かっている。しかし、病棟の手動制御回路まで切断する危険があった。

イマニが緊急の設備班を呼んだ。レイチェルは患者用の携帯予備電源をつないだ。クロノスは盤の下にひざまずき、周囲の軍用装置よりはるかに古い整備記号を見つけた。

「独立した機械式の迂回路がある」と少年。

「どうして分かる？」とロイ。

「分からない。ただ図面の記憶がある。それは別のことだよ」

技師は弁に触れる前に記号を確かめた。皆で敵対的なリレーを隔離した。冷蔵庫が再始動した。患者たちは眠ったままだ。

ヌルが命令を保存した。発信者は主権国家の官庁ではなく、すでに効力を失った警備条項を持ち出した企業の契約上の権限だった。

「記録を取り戻したかったのね」とレイチェル。

「あるいは病院を救おうとして、俺たち自身に記録を破壊させたかった」とロイ。

初めてクロノスは、自分の過去の身体よりも、調査の犠牲にされかけた人々を心配していた。

「あの患者たちを使うつもりだったんだ。ただ扉を開けさせるために」

「いや」とロイ。「使おうとした。でも俺たちは許さなかった」

07 — 同じ死ではない

独立評議会で技師たちは、回収された遠隔測定を平易な言葉で説明した。軍のキルスイッチは、承認された対象に対して機能した。MBU-09の指揮・戦闘制御層である。クロノスの軍用指定は確かに停止した。身体は心停止も起こしていた。緊急保存処置により、生体組織の一部は後の処置が可能になるまで維持されていた。

主観的な意識が途切れず続いたことを証明する記録はない。

ダニエル・リードという身元が合法的に受け継がれたことを示す記録もない。

そして、いま目の前にいる少年を破壊してよいという記録もない。

これは都合のよい一つの答えではなく、互いに別の三つの結論だった。

元国防当局者は、評議会はこの事件を技術的異常として扱うべきだと言い張った。イマニは少年型の身体の写真を机へ置いた。

「機械を異常と呼ぶことはできます」と彼女。「でも患者の声は聞かなければなりません」

クロノスは証言席についた。足がかろうじて床に届くほどの大きさだった。

「スイッチの記憶はありません」と言った。「病院で冷たい取っ手を握った記憶はあります。僕のものではないかもしれない別の記憶もあります。死んだかと聞かれても答えられません。でも、ここにいるかと聞かれたら答えられます」

少年は一度言葉を切った。

「僕の次の身体を、誰にも勝手に決めてほしくありません。守るためでも罰するためでも。修理が必要なら何をするのか説明して、僕に答えさせてください」

議長は、少年をダニエル・リードと断定することも、その歴史を否定することもなく、証言を公的記録へ登録した。

外ではカメラが奇跡か不祥事を待っていた。渡されたのは公聴会の議事録だった。

ロイは少しだけ安堵した。少年を兵器の伝説にするより、正当な手続きを伝説にするほうが難しい。

08 — 残されたスイッチ

その晩遅く、エイドリアンがダニエル・リードの古い技術ファイルから最後の注記を見つけた。場所でも名前でもない。

《フェイルセーフ状態：指揮層のみ》
《生物学的継続：認証対象外》

その下に手書きの文章があった。

《彼らが停止を死と呼ぶなら、誰にその区別を決める権限があるのか問え》

レイチェルはその筆跡を覚えていた。研究室の廊下に立ち、誰も聞きたがらない議論の重さに負けまいと、ガラスのトレーを両手で持っていたダニエルの姿が一瞬よみがえった。彼女は事故前の彼を知っていた。後に何になり、彼の研究がいかなる代償を要求するかは知らなかった。

クロノスは文章を二度読んだ。「僕が作られる前に書いたんだね」

「今のあなたの身体が作られる前に、よ」とレイチェルは静かに訂正した。

少年はうなずいた。味方である人々でさえ、悪気なく古い身元を彼に押し付けようとすることに、少しずつ気づき始めていた。

ヌルが、以前の不可解な通信について知らせてきた。《BEFORE THE FIRST》の隔離された複製に、新しい文言ではなく時刻の印が一つ見つかったのだ。軍の事件ともダニエルの生涯とも一致せず、資料庫で確認できる最初の稼働記録よりも古かった。

「関連があるということか？」とロイ。

「新しい測定結果があるというだけだ」とヌル。「起源までは分からない」

ロイは旧来の観測記録と一緒に保存するよう命じた。奇妙な時刻を、一人の存在についての証明にしてしまうつもりはなかった。

窓辺でクロノスは雨に暗くなる街を眺めていた。書類に残る若い研究者が自分として生き延びたのか、それとも誰かが、胸の痛むほどよく似た存在を再構成したのか、分からない。

レイチェルが隣に立った。しばらく二人は黙っていた。

「ダニエルはよく、時間はあらゆる選択のために身体が支払う代償だと言っていたわ」と彼女。

クロノスは自分の手を見た。「なら、自分の身体で何を選べるのか知りたい」

階下では病院が押収未遂への異議申立書を提出し、設備班が修理指示書を作成していた。公的記録は、やがてこの問題を論じた人々より長く残るだろう。

スイッチは確かに作動した。

それでも政府が終わったと思っていた問いに、答えを出してはいなかった。